今、平和を語る

米軍占領下の沖縄

嬉野京子さん（上）

うれしの　きょうこ／1940年東京生まれ。報道写真家・ディレクター。長年、沖縄を取材し続け、米軍基地問題での発信を続けている。著書に、『戦場が見える島・沖縄－50年間の取材から』(新日本出版社、2015年)など。

■祖国復帰行進に参加して

60年安保闘争が闘われていた20歳のときに、米軍に占領され施政権を奪われている沖縄があることを知りました。その後の1963年に、ある新聞記事が目にとまりました。そこには、日本と沖縄を分ける北緯27度線に双方から船を出して沖縄の祖国復帰をめざす「海上大会」が開かれ、本土の代表が大会後に、鹿児島から東京に向かって沖縄の現状を訴えながら歩く行進（祖国復帰行進）があると書いていました。

私は、当時、東京で月刊誌のグラビアの写真を撮っていました。グラフィックデザインの学校を卒業し、カメラの基礎も学んでいたので、日比谷公園などで集会があると撮影に行っていました。祖国復帰行進も撮影しに行くことになりました。

それまで、集会の写真を撮っても、たった一枚の写真で集まっている人の思いをどれだけ伝えられているか、その思いを知らないとまずいのではないかと、悩んでいました。

そこで、行進は、東京に入ってくるのを撮るのではなく、行進団が訴える沖縄の話を聞いてから撮りたいと思いました。そして、静岡の大井川の橋で待って、東京まで一緒に歩きましたが、そのなかで「沖縄の人間が5人集まると尾行がつく」「米兵の犯罪や事故で多くの命が失われている」などの沖縄の状況を聞いて驚きました。

■あなたの命が危ない

その翌年にも海上大会と行進が行われ、運動が盛り上がっていきました。私もまた参加して、沖縄の実態を伝える行進の重要さを感じましたが、話を聞けても写真がないんです。沖縄の人々が米軍に抑圧されているという話は少しずつ本土にも伝わっていくのですが、あまりにもそれが現実離れしていて、本当にそんな状況なのか、と訝る人もいました。

朝日新聞などの全国紙、有名な報道カメラマンなどが沖縄の写真がほしくて渡航申請を出しますが、通らないのです。先輩のカメラマンも申請を出して一ヵ月経っても許可がおりず、どうなっているのかを聞きに行くというので、ついていきました。すると、窓口の人が先輩の格好を見て「失礼ですが牧師さんですか」と聞きました。私が、「牧師さんでしたらなんなのでしょう」と尋ねると、「今の時期、宗教、教育、報道関係者の3つの方々は、審査をしないという机の下の箱に入れることになっていて、どんなに待っても申請許可は出ませんよ」と教えてくれました。

それを聞いて、私は「グラフィックデザイナー」ではどうかと思い、申請すると、審査に通りました。先輩たちを差し置いて、私が沖縄に渡れることになったのです。それが1965年で、同年4月28日に海上大会、4月10日に沖縄県内で行進が始まるから、その記録を撮ろうとしました。

沖縄に到着して、那覇の税関で手荷物検査を受けていると、係官がカメラを見つけて驚きました。「これを持っていたら、あなたの命がいくらあっても足りない」と言うのです。しかし、こちらもカメラを抑えられたらなんのために来たのかわからないので、「ポスターを作るためにきれいな海や花を撮りにきた」などと訴えて、押し問答になりました。係官は根負けして、「通してあげるけど、このカバンを開けるときは絶対に米兵関係者がいないか周りをよく見てから開けるんだよ」と言いました。無事に税関を抜けて街に出ると米軍兵士だらけで恐怖を覚えました。

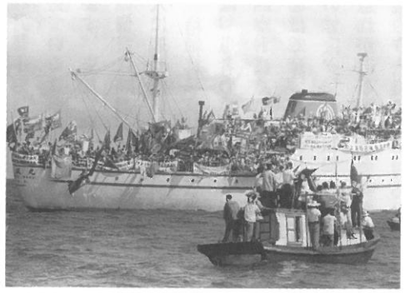
▶1965年4月20日、宜野座村漢那区で6歳の少女が米軍車両にひき殺される　ⓒ嬉野京子

■少女が米軍車両にひかれる

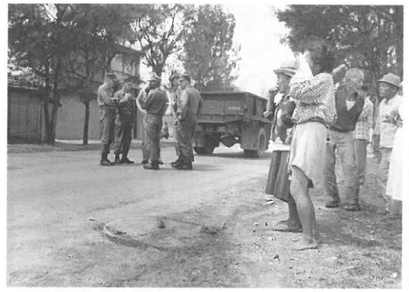
行進団に参加してからは、米軍に気をつけながら撮影をしていました。4月20日に宜野座村の小学校で行進団が休憩をしていたときでした。私は職員室にいましたが、外が騒がしくなったので、飛び出しました。校門から100メートルほどの所に人だかりができていたので、そこまで走って行くと、女の子が米軍車両にひかれて横たわっていました。その子は1歳年上のお姉さんが、4月の新学期から学校に行くようになり、毎日後ろを追っかけて小学校に遊びに行っていたそうです。

私はとっさに写真を撮ろうとしましたが、行進団の人に制止されました。「こんな写真を撮ったら嬉野さんの命が危ない」と言うわけです。撮ったらだめだと言われても、こうしたことは沖縄で日常茶飯事に起きていて、事故が起きても沖縄に捜査権も逮捕権もない、そんな実状を本土に伝える意味でも、どうしても撮りたいと訴えました。行進団の人は困ってしまって、今度は「行進団が弾圧される」と言いました。それを聞いて、行進団が弾圧を受けるようなきっかけをつくりたくないと怯(ひる)みましたが、やっぱりこれは撮らないといけないと説得しました。

すると、行進団が協議してくれて、「嬉野さんが言っていることはもっともだ、写真を撮ってもらいましょう」となりました。ただ、絶対に米兵に悟られないこと、撮影したフィルムは行進団に預けること、を条件に許可するということでした。



▲1964年8月15日、沖縄県解放海上大会



▲米軍の救急車が少女を乗せていった後、悲しみにくれる親族

そして、米兵に気づかれないように行進団の人の肩越しから撮影しました。写真の右端に写っている白いものはその人の肩です。

この写真で勉強をする小学校があり、その授業で子どもから「左に立って米兵に話しかけている人は警察ですか」と聞かれました。「いや、行進団の人だよ」と答えると、「なぜ行進団の人がここにいるの」と聞かれて、シャッターを押したときにはわからなかったことにはっと気づきました。米兵の視線をカメラからそらすために、わざわざ米兵のそばに行って話しかけていたのです。沖縄の人のいろいろな配慮のおかげでこの写真が撮れました。だから、私は、この写真は沖縄の人が撮ったもので、私はシャッターを押しただけだと思っています。

随分たってから米軍の救急車が来て、降りてきた衛生兵がピクリとも動かない少女に白々しく聴診器を当てました。そして、救急車に乗せて連れて行ってしまいました。

私はせめてきれいに拭いて棺にお花でも入れて返してくれるのか、と思っていましたが、聞くと、遺族がご迷惑をおかけしましたと基地に引き取りに行かないといけない、基地に入るための手続きが大変ということでした。それを知っていれば遺体を渡さないという闘いができたじゃないかと地団駄を踏みました。そういう時代でした。